

GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT

2024

Autumn

ブラジル最大の観光都市
リオデジヤネイロ

第二特集

[水先案内人] 安藤正康さんが語る

アラスカクルーズ

[発行](株)ジャパングレイス

[水先案内人]マーク朋子さんお勧めの

リオデジャネイロ

Rio de Janeiro



マーク朋子

MARK Tomoko

2007年、浅草サンバカーニバル最多優勝記録を持つ一部リーグ最大の老舗サンバチームに所属し、ブラジルをはじめ国内外にてパレードに参加。2013年からプロダンサーとしてイベント、TV、CM等に出演し、またNHK交響楽団など異なるジャンルとの共演を通じたサンバの啓蒙活動も行っている。



20代のはじめブラジル人の友人を通してサンバに出会い、音楽と踊りに魅了されたマーク朋子さん。その後単身ブラジルへ。本場のサンバチームを巡り、サンバチームの花形とされるトップダンサーを務め、ピースボートクルーズの水先案内人として洋上サンバカーニバルを開催したこともあるマークさんが、リオデジャネイロの魅力やカーニバルの見どころなどを紹介してくれました。

GLOBAL VOYAGE
2024 Autumn

CONTENTS

特集

[水先案内人]マーク朋子さんお勧めの

リオデジャネイロ…………… P3

美しい自然や歴史的建造物
情熱の街を巡る旅…………… P4

静かに観光を楽しみたい方に
お勧めのスポット…………… P6

絶景を前に思い思いに
ビーチレジャーを楽しむ…………… P7

熱狂の渦のなかへ
リオのカーニバル…………… P8

ピースボートクルーズ体験…………… P10

世界の文学…………… P12

第二特集

[水先案内人]安藤正康さんが語る

アラスカクルーズ…………… P14

PEACE BOAT ACTIVITIES…………… P18

表紙の写真

リオのカーニバルのダンサー。チームごとのテーマに合わせて、華やかな衣装を身につけて踊ります。衣装はほとんど手作りです。



美しい自然や歴史的建造物 情熱の街を巡る旅

かつてブラジルの首都であったリオデジャネイロは、現在も中南米有数の都市であり、観光においては豊かな自然と美しい景観、歴史的な建造物などが人気スポットです。リオのカーニバルも含め、世界中から訪れる観光客を魅了するリオを堪能してください。

まず「絶対に見逃してほしくない」とマークさんが開口一番紹介してくれたのは、リオへ入港するときに広がる景色です。「グアナバラ湾は世界三大美港の一つで、リオの象徴ともいえます。島や山々、そして海岸線を海から眺めることができるのは、クルーズならではの特権です。美しい景観はまさに感動もの。天気が良ければ入港の一時間前くらいからデッキに出ることをお勧めしたいですね。」

船上から見た「コルコバードの丘」は市内から登山電車で向かいます。「有名なのは、ブラジル独立100周年を記念して丘の上に建てられた巨大なキリスト像です。ブラジルの港町には小さきままなキリスト像が建っていますが、最も大きい像として観光名所になっています。また奇岩として知られる「ボン・ジ・アスカー」はケーブルカーで登ることができ、山頂からは市内を一望できコパカバーナ海岸も望むことができます。

カーニバルの時期に行くならとマークさんがお勧めしてくれたのが「アレゴリア」の見学。「アレゴリアはカーニバルに登場する巨大な山車です。シタージドサンバという大きな倉庫で10チーム以上の山車が製作されています。ガイドもいるので時期によっては見学が可能です。タイミングが合えば会場に運ばれる様子を見学できるかもしれません。」

旧市街地セントロには全長270mの「水道橋」や周辺には古い街並が残るサンタテレサがあり、チリ出身のアーチスト、ホルヘ・セラロンによる「セラロンの階段」などが見どころです。カーニバルの時期、セントロはブラジル文化を味わう絶好のスポットになるとマークさんは言います。「特にセントロのなかにあるラバ地区はナイトクラブやレストランバーがあり食事やお酒とともにライブを楽しめます。お洒落をして仮装している人も多く見かけるはずですよ。お店は日中もオープンしているのでその賑わいと音楽を楽しんでください。」



「コルコバードの丘」後方から世界三大美港の一つであるグアナバラ湾を望む。



4:歴史的建造物が並ぶシネランドリアにある「リオデジャネイロ市立劇場」。5:セントロにあるリオの近代化を象徴するリオデジャネイロ市庁舎。1923年に開館した。6:街の景観を彩る黄色い路面電車「トラム」。観光で利用するのも便利。7:長さ125メートル、215段に及ぶアート作品「セラロンの階段」は観光名所の一つとなっている。8:南米全土で見られる郷土料理「エンバナダ」は中身の具材が地域で異なる、おやつ的な食べ物。



港に入る時の景色は最高ですよ!

1:その形状から「砂糖パン」を意味する名称の「ボン・ジ・アスカー」へ運んでくれるケーブルカー。車窓から素晴らしい景色も楽しめる。2:景勝地の多いリオのなかでも屈指の美しさのボン・ジ・アスカーの夕景。頂上から見る夕焼けもまた絶景。3:標高710メートルの「コルコバードの丘」のキリスト像はリオのシンボル。新世界七不思議にも選ばれている。



静かに観光を楽しみたい方にお勧めのスポット

賑やかなリオもいけれど、静かに観光も楽しみたい、という方にお勧めなのは「リオデジャネイロ植物園」です。「リオの真ん中にありますが、とても静か。日本では見られない美しい植物、そして生物たちに出会えます。湖のほとりは和みのポイント。観光客が少ないのでゆっくり過ごせると思います」。穴場的なスポットといえばと紹介してくれたのは「王立ポルトガル図書館」。1837年に設立され貴重な古書が35万冊以上収蔵されています。「別名、幻想図書館といわれ、この図書館は見学だけで本に触れることはできません。しかし、館内の雰囲気は素晴らしいし、とても美しい図書館で訪れる価値はあります。落ち着ける空間で私も大好きな場所です。このほかブラジル国立図書館も重厚感と建築美に圧倒されます」。

リオには博物館、美術館も多く、ブラジルの過去を学べる「国立歴史博物館」、建物が特徴的な「ニテロイ現代美術館」、環境問題などをテーマにした「明日の博物館」など多彩で、アートに

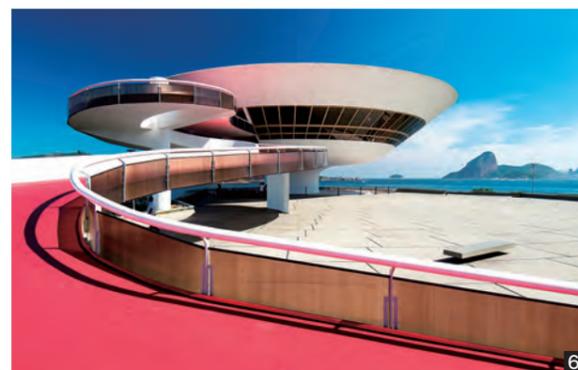
関心のある人ならどこにいくか迷うほど。マークさんのイチオシは「ルイ・バルボサ・ハウス・ミュージアム」です。「美術館賞はもとより素敵な庭園があり、海岸近くにあるためコパカバーナ海岸を眺めることもできます」。

リオの滞在日数が長めのクルーズの方向けにはなりますが「チジユカ国立



1.天井近く3階まで設けられた書棚が圧巻の「王立ポルトガル図書館」。35万冊以上の古書が蔵書されている。2.ラテンアメリカ最大の図書館「ブラジル国立図書館」。ギリシア復興洋式の建物が特徴。3.「ブラジル国立図書館」は一般図書のほか定期刊行物や写真、映画、音楽のアーカイブなどもコレクションしている。

公園をゆっくりと巡るのも最高の体験になるでしょう」とマークさん。「個人的にはリオは郊外へ行くほど魅力的で、連なる島々や透明度の高い海は驚くほどの美しさです。喧噪を離れるほど素敵な場所が多いんです」とのこと。コルコバードの丘も含む「チジユカ国立公園」は32kmの世界最大の都市森林として知られています。「大自然を満喫でき、すべてが景勝地といえる公園で過ごす時間を堪能してほしいです」。



4-5.「チジユカ国立公園」は手つかずの自然と豊かな生物多様性を誇り、滝や洞窟があり多くの動植物が生息している。6.空飛ぶ円盤、という異名をもつ「ニテロイ現代美術館」は世界的な建築家オスカー・ニーマイヤーの設計で彼の代表作の一つ。



図書館の本の数には圧倒されますよ!

「リオのビーチは賑やかですよ、地元

のカリオカ(リオデジャネイロ市民または出身者を指す総称)たちが水着、薄着で闊歩しビーチバレーを楽しんでいます」とマークさん。売り子の多さも名物で、お肉の串焼きやエビなどを次々に売りにきます。マークさんのお勧めはフレッシュジュース。「どこのビーチに行ってもジューススタンドがあります。これはスゴく美味しいです。リオの場合は果物を2種類以上混ぜて作るのが定番です」。喉を潤しながら、美しい海とヤシの木が立ち並ぶ景色を眺め、リゾート

ト気分を味わってください。

「およそ4kmにわたって砂浜が続くコパカバーナ海岸はホテルやビル群が建ち、洗練された街という感じで、イパネマはもう少し落ち着いた感じがあります。有名なボサノバの曲「イパネマの娘」が書かれたというお店もビーチから一本内側に入ったところにあります。イパネマの隣のレブロン海岸はさらに穏やかで、ビーチレジャーをゆっくり楽しめます。ビーチ沿いに高級ホテル、高級ブティックなどが続き大人の雰囲気がありますね。またビーチはもとより山々の美しい景色も魅力です」。



絶景を前に思い思いにビーチレジャーを楽しむ

リオと言えばまず「ビーチ」を思い浮かべる人も少なくないでしょう。南米屈指の美しさ、そして広さ。「日本の海とはまったく違うので驚いてしまうかも」というマークさん。リオっ子「カリオカ」気分ですビーチを満喫しましょう。



リオ観光の定番ともいえる、リオで最も有名なビーチ「コパカバーナ海岸」。



7: 洗練された雰囲気と美しい景観で知られる「イパネマ海岸」。8:「コパカバーナ海岸」ではスポーツから日光浴、夜間のビーチパーティなどが楽しまれている。9: 爽やかな味わいのカクテルがビーチに似合う。



Carnaval do Rio de Janeiro

リオのカーニバルのコンテストは7万人以上収容できる「サンボドロモ・スタジアム」で開催される。「地上最大のショー」にスタジアムの熱狂は頂点に。トップチームによるパレードは夜を徹して行なわれる。また本番が終わった週の土曜日には上位入賞を果たしたチームによる「チャンピオン・パレード」が披露される。



大勢の観客とサンバチームの熱気は最高潮!

Voyage 116クルーズでリオ寄港中に撮影されたカーニバル風景(2024年2月)。



熱狂の渦のなかへ リオのカーニバル



世界最大のお祭りともいわれるリオのカーニバルの期間中、リオはまさに音楽と踊りに明け暮れます。その熱狂に巻き込まれながら、地元の人たちと一緒に楽しみ盛り上がりましょう。リオへ寄港する前には船内で水先案内人による、カーニバルの見どころなどを紹介する講座やダンスのワークショップが開かれますので、ぜひ参加ください。

カーニバルが行なわれる5日間、世界中から100万人の観光客が集まりリオの街は熱気に包まれますが、マークさんによると、その1カ月前から街はカーニバル色となり賑わいをみせはじめるそうです。「コンテストに出場するチームだけではなく地域ごとにサンバチームが

カーニバルはキリスト教のお祭り、復活祭に向けて肉食を40日間断つ前に行なわれる「謝肉祭」のことです。世界中にさまざまなカーニバルで最も有名なのが「リオのカーニバル」です。「リオのカーニバルといえばサンバですが、そのルーツはアフリカから連れてこられた黒人奴隷にあります。アフリカの『センバ』意味「音で遊ぶ」という音楽と踊りが持ち込まれ、奴隷制度が廃止された後も、アフリカ移民が貧しい生活のなかでセンバを継承してきました。そしてカーニバルの際は集団で踊り、練り歩いたのが長い期間をかけて発展し、現在のようスタイルになったといわれています。リオのカーニバルの元をたどると労働者階級の人たちが1年に1度、自分たちが主役になり輝く舞台なんです。」

あり、それぞれ独自の音楽と踊りで、街中のあちこちでパレードしているのと一緒に楽しんでほしいです。」
メインパレードが行われるのはサンボドロモ・スタジアム。強豪のサンバチームが優勝を目指し、約80分かけてパフォーマンスを行います。一つのチームが4000人規模になり、スケールの大きさにも圧倒されます。
「豪華絢爛な山車、ダンサーたちが華やかで美しい衣装をまとい重なり合い踊る、壮大な移動オペラ。すべてが見どころですが、特に「コミッサン・ジウレンチ」というパレードの先頭でチームを観客に紹介するグループは必見です。テーマを表現するためにパラスチットや早着替えなど、あつと驚く仕掛けもたくさん。また大きな冠や羽根を付けて踊る

花形の「パシスタ」は4000人のチームのなかで20人ほどの選り抜かれたダンサーで、彼女たちにも注目です。」
コンテストの優勝賞金は莫大で、そのお金でまた1年かけて山車や衣装をつくり、演出などの準備を進めていくそうです。
最後に、サンボドロモ・スタジアムに行くと、マークさんが教えてくれました。「会場だと売り切れている可能性があるため、露店などで、その年のテーマが描かれたTシャツを買うことをおすすめします。地元の人たちが声をかけてくれるので交流にもなりますよ。」



洋上で行われたリオのカーニバルの解説講座。



ピースボートクルーズ体験

これまで2回、ピースボートクルーズに乗船している森山さんご夫妻。「寄港地での体験」はもちろん「船内での新しい出会い」が人生の糧になっていると語ります。船旅で生まれた人とのつながりを下船後も大切にしている森山さんご夫妻にご自身の体験を語っていただきました。

森山太一さん
森山政子さん

ピースボートクルーズは第96回のオセアニア一周とVoyage116世界一周にご夫婦で乗船。「あと3回は世界一周する予定です」。



ピースボートクルーズへ乗船したのはどのようなきっかけからですか。

太一さん…ピースボートが発足した当時から「船に乗って世界をまわり、さまざまな国の人と出会い、つながり、そこを原点に平和をつくっていく」という理念に関心があり、いつか乗船したいと思っていたのです。2017年、仕事を退職してようやくその夢を叶えることができました。「世界を見てみたい」と妻に話したらとても興味をもってくれて、夫婦で参加したのが最初です。

最初の乗船ではどのようなことが印象に残っていますか。

太一さん…最初はオセアニア一周のミドルクルーズでしたが、すべてが面白かったです。寄港地ではオーストラリアやバリ島で現地の人たちと交流できたことが印象深かったですね。船内の居酒屋「波へい」で20人ほどの仲間ができて、仕事も年齢も歩んできた人生も違う人たちと友だちになり、今でも付き合っている。



があります。それで、その仲間たちと一緒に世界一周しよう、ということになって申し込みました。

それがピースボート Voyage116クルーズですね。世界一周ではどのような期待がありましたか。

太一さん…はい、コロナ禍で船旅が延期になってしまい、かつその期間中に私がリンパ腫を発症して長い入院生活を送りましたが、絶対に乗る！と強い思いをもって乗り越えて、ようやく実現した世界一周でしたからとてもワクワクしましたね。今回も妻とともに参加しましたが事前に楽しみにしていたのはマチュピチュやリオのカニバル、マダガスカルです。

初めての世界一周はいかがでしたか。

太一さん…乗船して実感したのはミドルクルーズとは旅の期間もそうですが、クルーズのボリューム感が全然違いました。スケールの大きさを実感しましたね。

政子さん…広い世界は行ってみたいと何もわからないと感じました。太平



マチュピチュで購入した民族衣装。

船内のイベントなどで印象に残っていることはありますか。

太一さん…実は私は「スポーツ吹き矢」の自主企画を運営しました。前回のクルーズで食事時にたまたま隣に座った方から吹き矢の自主企画をやるという話を聞いて、お手伝いした経験があつて、今回は自分が主催しようと思つて乗り込んだのです。延べで30回くらい、週に2〜3回開催して400人くらいの参加がありました。海外からの乗客もいらつしやつたので、参加者も多国籍になり、賑やかに盛り上がりました。「スポーツ吹き矢」は年齢や体力に関係なく楽しめますからね。クルーズの最後の方は大会も開いて楽しい思い出ができました。

政子さん…私は「健身気功」の自主企画を運営しました。これは中国の健康体操

リオのカニバルなども堪能できましたか。

太一さん…はい、当初はパレードを二つくらい見ればもう十分くらいに思つていたのですが、大音響のなか最高に盛り上がり、妻と踊って飲んで、気がついてから夜が明けていました(笑)。

政子さん…ほかにもマダガスカルのバオバブの木は空に届きそうに高く高く、不思議な形なのが本当に印象的で。薬になったり、飲み物になったり人々の生活を支えている不思議な形の大木はこの目で見れてよかったです。



マダガスカルのバオバブ街道。



イースター島のモアイと。



「スポーツ吹き矢」開催中の様子。



「健身気功」開催中の様子。

た仲間と出会い、感じたことを話し合つたことがその後の人生の糧になつてい

改めてピースボートクルーズの魅力をどんな点で感じられましたか。

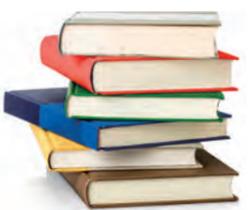
太一さん…今回は特に海外から乗船された方が多くいたので、船に乗った瞬間から「世界」を感じました。また寄港地をはじめ、世界とは、行つてみて、自分の肌で感じ、目で見て、体験してみないとわからないということですね。そこで多くの体験をし、同じような価値観をもつた仲間と出会い、感じたことを話し合つたことがその後の人生の糧になつてい

太一さん…スエズ運河を通りたい、サントリニ島に行きたい、オーロラを見たいなど夢がふくらんでいます。

世界の文学

《編集部おすすめ》

旅先の“今”を感じられる話題の作品



海外文学の持つ最大の魅力は、その国の歴史や文化、そして人びとの感情が細部まで描かれていること。ニュースや歴史書と異なり、読者は物語の中に生きることで、その地の歴史や文化、価値観を肌で感じることが出来ます。宗教や国民性といった「違い」に出会い、他者の感情、思考、世界の見方を学び、同時に自分と同じ内面を備えた人間として「共感」することでしょう。旅先を深く知り、よりいっそう味わうために、海外の文学にふれてみるのはいかがでしょうか。



『ラブスター博士の最後の発見』
アンドリ・S・マグナソン(著)
佐田 千織(訳)
創元社 [アイスランド]
夏になるとアイスランドにやって来るキョクアジサンが、フランスの首都パリに大量に出現した。ここから始まる世界の異変の原因は、通信などで世界が飽和状態になったことだった。アイスランドのラブスター博士率いる科学者集団によって無事に異変は解決されるが……。優しくてちょっと奇妙な、世界の終わりと再生の物語。



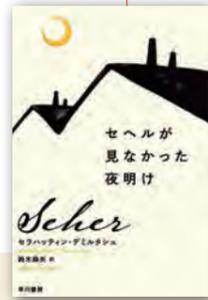
『四人の交差点』
トンミ・キンヌネン(著)
古市 真由美(訳)
新潮社 [フィンランド]
助産師として強く生きた祖母。写真技師だった奔放な母。子ども好きで物づくりに長け、若くして亡くなった父。それぞれの声で語られる喜びと痛みの記憶は、結末でやがてひとつの像を結び、ある秘密を照らし出す。フィンランドの歴史と一家の営みが豊かに響きあう、百年の物語。



『ひとりの双子』
ブリット・ベネット(著)
友廣 純(訳)
早川書房 [アメリカ]
自由をもとめて16歳の双子は都会をめざした。姉のデジレーは失意のうちに都会を離れ、みなが自分を知る故郷に帰った。妹のステラは誰も自分を知らない場所で裕福に暮らしているという。白人になりすまして。だが、切れたように見えつつながりが、ふいに彼女たちの人生を揺さぶる。人種、貧富、性差……社会の束縛のなかで懸命に生きる女性たちを描く長篇小説。



『春』
アリ・スミス(著)
木原 善彦(訳)
新潮社 [イギリス]
一人は、長年相棒だった脚本家を亡くして悲嘆に暮れる老演出家。もう一人は、移民収容施設で心を殺して働く若い女性。絶望を抱え、それぞれ北の国にたどり着いた二人は、不思議な力を持つ少女との出会いを通じ、人生の新しい扉を開ける。EU離脱に揺れ移民排斥が進むイギリスを描く、奇想あふれる作品。



『セヘルが見なかった夜明け』
セラハッティン・デミルタシュ(著)
鈴木 麻矢(訳)
早川書房 [トルコ]
刑務所に巣をかけた雀の夫婦、職場の同僚に恋をした女性、シリア・トルコ国境地帯にあるレストランの店主、父と疎遠になっている本好きの女性……。『クルドのマンデラ』と呼ばれ、現在も政治犯として拘束されているトルコ人政治家が、人々の生活を描いた短篇集。



『ウィズ・ザ・ライツ・アウト』
ヴィルジニー・デバント(著)
博多 かおる(訳)
早川書房 [フランス]
かつては伝説のレコード店主ヴェルノン、現在は家賃滞納で自らのアパートマンを追い出され、かつて彼の店に出入りしていた友人たちの家を渡り歩くことに。友人たちの多くはロック・ミュージシャンだったが、今はもう別の人生を送っている。その一人一人の人生が、20年の歳月がフランスの社会と人々に与えた変化を物語る。パリの片隅で生きる人々の哀しさと滑稽さを音楽が彩る、現代版バルザック『人間喜劇』。



『ネット狂詩曲』
劉 震雲(著)
水野 衛子(訳)
彩流社 [中国]
終わらなきネット時代のから騒ぎ。ここ数年、中国のネットを騒がせた事件は、実はすべて一人の人物につながっていた……。現代中国随一のユーモア作家・劉震雲が辛辣な筆致で現代中国の問題をえぐり出す。



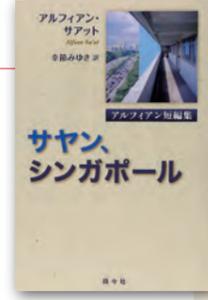
『女であるだけで』
ソル・ケー・モオ(著)
吉田 栄人(訳)
国書刊行会 [メキシコ]
ある日、夫フロレンシオを誤って殺してしまったオノリーナ。なぜ、彼女は夫を殺す運命を辿ったのか？オノリーナの恩赦を取り付けようと奔走する弁護士テリアとの面会で、オノリーナが語った数々の回想から浮かび上がったのは、14歳で身売りされ突然始まった夫との貧しい生活、夫からの絶え間ない暴力、先住民への差別といった、おそろしく理不尽で困難な事実の数々だった……。



『バーガーの娘』
ナディン・ゴードイマ(著)
福島 富士男(訳)
みすず書房 [南アフリカ共和国]
少女は、悪名高いアパートヘイトの社会のなかで翻弄されながら育ち、大人になり、やがて自分を探す旅に出る。「海を越えてみよう……」。父親が獄死した今、ひとり残されたローザ・バーガーには、知りたいことがある、それも自分の身体をとおして、バーガーの娘であることの意味を。1991年、女性として25年ぶりにノーベル文学賞を受賞した作家の名著。南アでは一時発禁処分を受けたが、今では各国語に翻訳され、20世紀を代表する世界文学の金字塔となった。



『マリゴールド・ホテルで会いましょう』
デボラ・モガー(著)
最所 篤子(訳)
早川書房 [インド]
ロンドンで医師をしているインド系のラヴィは、いとことともに新事業を立ち上げた。物価の安い故郷のパンガロールに高齢者ホームを作り、イギリスの引退者を送り込むのだ。馬の合わない下品な義理の父親も含めて……。やがて、宣伝につられた様々な男女が、彼らの新たな家となるマリゴールド・ホテルに集まった。インドでの刺激的な新生活を期待して。



『サヤン、シンガポール』
アルフィアン・サアット(著)
幸節 みゆき(訳)
段々社 [シンガポール]
多様な民族、文化、宗教、言語が交錯し、繁栄を続けるシンガポールで、成功とは無縁にひっそりと不器用に生きる人々……。公営アパートの老女、落ちこぼれのマレー系の少年、離婚したゲイの中年男、投資話に遭遇した若いカップルなど、名もなきシンガポール人たちの姿を、気鋭の作家が慈しみをこめて描く、ちょっぴり切ない味わいの12編。



『夜、僕らは輪になって歩く』
ダニエル・アララルコン(著)
藤井 光(訳)
新潮社 [ペルー]
内戦終結後、出所した劇作家を迎えて十数年ぶりに再結成された小劇団は、山あいの町をまわる公演旅行に出発する。しかし、役者たちの胸にくすぶる失われた家族、叶わぬ夢、愛しい人をめぐる痛みの記憶は、小さな嘘をきっかけにして、波紋が広がるように彼らの人生を狂わせ、次第に追いつめていく……。

Alaska Cruising

ピースボート Voyage 117クルーズでバンクーバーからスワードまで、水先案内人として乗船しました。船内で行った講演会では「アラスカクルーズの魅力」と「アラスカの歴史と文化」という二つのテーマでお話しました。これに加えて「寄港地紹介」も行いました。講演数は多くなりましたが、どの講座も皆さん非常に熱心に耳を傾けてくださるのが印象的でした。アラスカの歴史について若い方からの関心が強く、また、海外から参加される方からもたくさん質問をいただきました。講演後も「もっと詳しく話が聞きたい」といった方々が列をつくれたほどで関心の高さが嬉しかったです。講演以外でも船内で食事やコーヒータムのひとときをはじめ多くの方々とお話する機会があり、老若男女さまざまな方とお話できたのがとても大きな収穫でした。

単なる観光ではなく、世界を見たい、知りたい、確かめたい、という意欲に満ちた方が多いのは、ピースボートクルーズの特徴だと再認識しました。久しぶりの水先案内人としての乗船でしたが、個人的には非常に心地よかったです。まず食事が最高でした。常に和洋食選べますし、buffetでは定期的にメニューが増えたりして、ほかの客船では出ないようなポピュラーな日本食メニューも多くて感激しました。船が大きいので乗り心地もよく、船室も過ごしやすく快適でした。14階には外を見ながら仕事ができるスペースもありお気に入りの場所になりました。今ままで最も充実したクルーズになったといっても過言ではありません。



[水先案内人]

安藤正康さんが語る アラスカクルーズ

ピースボート Voyage 117クルーズにおけるアラスカクルーズで水先案内人に安藤正康さんをお迎えしました。現地で長年旅行会社を運営され、各種ツアーの手配、観光ガイドでも活躍されている安藤さんに、乗船された7日間のクルーズを振り返ってもらいました。



安藤正康 ANDO Masayasu

「アラスカの達人」と呼ばれるアラスカアドベンチャーのスペシャリスト。HAIしるくまツアーズ代表。常に新しい発想を持って、さまざまな角度から「最後のフロンティア」を紹介している。ピースボートとの縁は、およそ20年前。ピースボートにおいて初めてアラスカに寄港することになった際、ツアー手配のコーディネイトのためスタッフがコンタクトをとったことからスタート。現在は水先案内人として洋上講演などを行いアラスカの魅力を伝えている。



5・6:観光シーズンにはアンカレッジから鮭やオヒョウを狙って多くの釣り人がやってくる。7:名産であるオヒョウの水揚げ。

キーナイ・フィヨルドの麓 [スワード]

山と海でアクティビティが楽しめるスワード。キーナイ半島のリザレクシオン湾に面していて、1903年にアラスカ鉄道の開通とともに生まれた街です。雄大な自然と新鮮なシーフードが観光客を魅了しています。



スモークサーモンも定番のひとつ。お土産としても人気。

驚くほど肉厚なおヒョウのステーキ。

100年の歴史を誇る世界最北の地ビール。

オヒョウはクセがなくフライにしても美味しい。

スワードは人口約3千人の小さな港町です。キーナイ・フィヨルドの麓に位置し、アラスカ鉄道の南の終着地でもあります。リザレクシオン湾の海沿いに整備された遊歩道を散歩すると美しい景色を望めるでしょう。オプショナルツアーの「キーナイ・フィヨルド国立公園」のクルーズでは氷河やフィヨルド、野生動物のウォッチングが楽しめます。漁港ならではのシーフードグルメでは肉厚で脂がのっているオヒョウのステーキやフライがお勧めです。

次はアラスカの大地を訪れてください

ピースボートクルーズは世界で最もユニークな客船です。エンターテインメントに徹するクルーズも素晴らしいと思いますが、ピースボートは世界を回りながら、その国の人々と交流し文化、政治、経済、社会、歴史といったものを考えていく場をつくってくれます。また乗客同士あるいはクルーとの交流や触れ合う機会も多く、船内で新しい友人ができる。そんな客船はほかにはありません。そういう意味では「宝」です。これからも期待しています。アラスカクルーズについて正直に言うと、私はアラスカ観光の入門編だと思っています。アラスカの最大の魅力は広大な大地、手つかずの自然、多様な野生動物です。アラスカの海も素晴らしくいますが、それはほんの一部。講演でも言いましたがこのクルーズをきっかけに次回ぜひアラスカの大地を訪ねてみてください。



Alaska Cruising

デッキから望む内海航路「インサイド・パッセージ」。

さて、肝心のアラスカクルーズですが、今年の夏は天気があまりよくなくて、曇りや雨天の日が多かったのですが、それがかえって幸いしました。雨が降ったせいで水が水分を含み、氷河が崩れやすくなりました。そのためハーバード氷河では停泊した30分の間に大きな崩落を4回以上も目撃できたのです。とてもラッキーでした。ほとんどの方が動画で収録できたと思います。あれだけの崩落は私も初めての体験で、ブリッジから船内放送で実況をしながらかなり興奮しました。氷河が流れ、下に落ちていくときにひび割れて「ゴロゴロゴロ」と雷のような音が聞こえ「アラスカサンダー」と呼ばれているのですが、その迫力ある雷音も皆さんにとって忘れられない思い出になっていることと思います。



1:ハーバード氷河の400メートル付近を航行し停泊する。2: Voyage117では多くの氷河の崩落を見ることができた。3・4: 氷河の水でウイスキーやカクテルを楽しむ人も。

のときも椅子を外に向けてとるようにアドバイスしています。野生動物と出会うチャンスを逃してはもったいないからです。今回はラッコ、クジラ、イルカ、シャチなどを見ることができました。特にクジラが船の右舷前でジャンプしたときは驚きました。船から離れていく15分ほどの間にジャンプを繰り返していた姿が目には焼き付いています。氷河やフィヨルドの大自然を堪能しながら、氷河の崩落や多くの野生動物と出会えた幸運に恵まれたクルーズだったと思います。

野生動物の楽園アラスカ

大自然がそのまま残るアラスカは、北米における野生動物の宝庫です。Voyage117でもデッキから多くの野生動物を見ることができました。



【クジラ】

しぶきを上げて堂々と海原をゆく姿は感動ものです。運が良ければ水上に飛び出すジャンプを目撃できます。



【アザラシ】

サーモンやイカ、タコなどを捕食しています。夏場にはよく流水の上でのんびり休んでいます。



【ハクトウワシ】

アメリカの国鳥です。夏場はサーモンを捕食します。白い頭が特徴で精悍な顔つきをしています。



【ラッコ】

海岸地帯で見かけることが多く、愛らしい姿に癒されます。水中でも厚い毛で体温を保っています。

ガザの人々に 野菜を届ける



パレスチナ・ガザ地区では、イスラエル軍の攻撃によって多くの人が命の危機に瀕しています。最低限の食料を手に入れることも難しい状況で、特に野菜の不足は深刻です。戦禍で暮らすガザの人々に一刻も早く野菜を届けるための募金にご協力ください。



PEACE BOAT
<https://info.pbcrui.se/jp/gaza>

2023年10月、ハマスによるイスラエル攻撃をきっかけに悪化したイスラエル・パレスチナ情勢と、ガザにおける未曾有の人道危機によって、2024年9月末時点で4万人以上のパレスチナ人が亡くなっている、その7割が子どもと女性です。ガザ地区はイスラエルによって造られたアパルトヘイト壁（人種隔離壁）と呼ばれる高さ8mにも及ぶコンクリートの壁に囲まれています。そのような逃げ場のないガザ地区で、イスラエル軍はハマス掃討作戦として、病院、学校を含むあらゆる民間施設や住宅にも攻撃を開始しました。

余儀なくされています。戦闘の激化で通行証が下りなかったり、検問所が閉鎖されたりして支援物資が届かず、生きるために最低限必要な医療品や食料などが不足し、飢餓や病気で亡くなる人が増え続けています。

ピースボートは20年以上、パレスチナ難民支援や市民交流を行ってきました。今回もイスラエルによるガザ市民への攻撃を強く非難するとともに、即時停戦やイスラム組織ハマスによって連れ去られた人質の解放を訴えてきました。攻撃が長期化しガザ地区の人々が非常に厳しい状況に陥っているなか、日本からできることとして緊急食料支援を立ち上げました。

家を追われて逃げ惑う一般市民に、イスラエル軍は容赦ない無差別攻撃を行っています。人々はガザ地区内で子どもを抱えて2回、3回、4回と避難を繰り返す壁に囲まれています。そのような逃げ場のないガザ地区で、イスラエル軍はハマス掃討作戦として、病院、学校を含むあらゆる民間施設や住宅にも攻撃を開始しました。

中学生のうちに自分の足で世界に踏み出し、たくさんのホンモノや多様な価値観に出会ってほしい、という熱意のある明星学園の先生方とピースボートは昨年「国際交流クルーズ」の構想を。そのため、準備を進めてきました。初の取り組みでしたが、たくさんの中学生が興味を持ってくれました。志望動機は



国連によると、深刻な食糧難でガザの子どもの10人に9人は、栄養失調や発育障害を懸念されています。特に子どもたちの成長や健康維持に欠かせない野菜の不足が深刻化していると聞き、ガザ地区に本部を置くNGO「国境なき青年団」を通じて、野菜を届けることにしました。約35米ドル（およそ5,000円）で1世帯分の野菜セット

を現地に届けることができます。これは5人家族なら4〜5日分の食料に相当します。今年4月と8月に出航した2つのクルーズの船内でも「ガザを見捨てない！野菜を届けようキャンペーン」を開催し多くの皆さまのご協力をいただきました。ガザの子どもたちの命を守るため、イスラエルの攻撃をやめるよう訴えるとともに、支援へのご協力をお願いします！

あなたかいご支援をお願いいたします

募金方法

- 郵便振替 ●銀行振込
- クレジットカード



お気軽にお問い合わせください

TEL.03-3363-7561
10:00~16:00 土日祝定休

明星学園中学校×ピースボート 国際交流クルーズ

今年の夏、東京都三鷹市にある明星学園とピースボートがコラボして企画した「国際交流クルーズ」が行なわれました。中学生27人が夏休みを利用して8月17日から28日にかけて横浜からシンガポールまで乗船。船内での講座や英会話教室への参加、乗客やクルーとの交流、そして寄港地でのプログラムなど多くの出会いと多様な体験が詰まった12日間になりました。



中学生のうちに自分の足で世界に踏み出し、たくさんのホンモノや多様な価値観に出会ってほしい、という熱意のある明星学園の先生方とピースボートは昨年「国際交流クルーズ」の構想を。そのため、準備を進めてきました。初の取り組みでしたが、たくさんの中学生が興味を持ってくれました。志望動機は

さまざま「いろいろな国のご飯が食べた」「英語を使ってみたい」といったことから「ネットで見た他の国の情報を自分の目で確かめたい」という子もいました。

乗船当初は遠慮がちだった中学生も「はじめまして交流会」などを通し溶け込むのに時間はかかりませんでした。3日目からは水先案内人による特別授業もスタート。「思春期」や「共生」などをテーマにした話に熱心に聞き入っていました。毎夕のホームルームにはピースボートスタッフがゲストとして参加し、その話を聞くことで多様な「生き方」に触れることができました。また船内では日本はもとより海外からご乗船のお客さまと気軽に挨拶したり、話をしたり、といったことも自然とできるようになり、毎日開催されている英会話教室の成果が出ているようでした。

このほか出航記念特別ショーでは中国琵琶やフラメンコショーを鑑賞したり、ウエルカムパーティーでフォーマルデザイナーを堪能したり、特別にブリッジを見学したりと「お楽しみ」のプログラムも満載しました。

今回の寄港地は香港とシンガポール。いずれも現地の学生が案内してくれる特別ツアーが組まれていました。観光名



所を巡りながら、街の様子や人々の暮らしぶりを見て、日本との違いを知り、たくさんの発見をした滞在になりました。船内最終日、グループに分かれて大勢の観客を前に行った国際交流をテーマにした発表会では「偏見を捨てて優しい気持ちで話す」「一緒にご飯を食べ、会話をすれば、仲良くなれる」といった、体験を通じた考え方が披露され、大きな拍手を浴びていました。「地球市民の一人」としての自覚が芽生えるとともに、一人ひとりが大きな成長を遂げたおきの夏休みになりました。帰国後、保護者からは「エネルギーと愛みたいなのをたくさんもらい、家庭では与えられないものを吸収してきました」と、これからの楽しみにするような感想をいただきました。

船上百景 [アニバーサリー]



船内でできた友人とともに誕生日を祝って「乾杯!」。

特別なお祝いの席に アニバーサリープランをどうぞ

「おめでとう!」「ハッピーバースデー!」1500名を超える乗客がいる洋上では毎日が誰かしらの誕生日であることが多く、レストランではお仲間とお祝いの席がよく設けられています。誕生日以外にも結婚記念日や金婚式などのお祝いを世界一周の洋上で、と企画される方もいらつしやいます。特別な空間で、特別なひとときをとると、メニューにも凝りたいもの。ピースボートクルーズではそんなお祝いの席に「アニバーサリープラン」をご用意しています。誕生日にはバースデーケーキのサービスがあるほか、アップグレードメニューとしてウエディングケーキ、フルーツプレートやお寿司、牛ステーキなど事前にご相談いただければご要望に応じたアレンジが可能です。一生忘れることのないひとときを、心を込めて演出します。



アップグレードメニューでスペシャルな演出を。



メニューはご要望に応じてアレンジ。



「よく来てくれた」2000年に訪れたガザ難民キャンプ。当時、ピースボートのツアーでホームステイをしたときに言われた言葉です。何十年にもわたり抑圧されてきた環境下で、「自分たちのことを知ろうとしてくれる人たちがいること、直接会いに来てくれたことが本当に嬉しい」と言われました。訪れるだけでも人を勇気づけることができるということを知った体験でした。

あれから24年——あの時訪れた家や建物は破壊されているかもしれないと、目を背けたくなるようなニュースが日々続いています。しかもこれは今に始まったことではなく、2009年にもガザへの大規模な空爆がありました。その時のイスラエルによる砲弾によって娘3人の命を奪われた医師アブラエーシュ博士が一本の映画の上映にあわせて先日来日しました。映画のタイトルは『私は憎まない』。愛する娘の命を奪われてもなお「復讐では何も解決しない」という信念をもち、共存を訴え続ける博士。そんな彼が「他の国に行くことは互いの理解を深めるための投資です」と語っています。

その土地を直接訪れることで興味や湧き関心が高まる。まさに旅の原点はそこにあるように思いますし、それが平和の種にもなると信じています。世界一周クルーズでは多くの土地を訪れると同時にたくさんの方の出会いが詰まっています。まさに互いの理解を深めるにはぴったりの旅なのかもしれません。(M・H)